

心光寺からのお便り

第五回定例聞法会のご案内

由布の里では採り入れもすっきり終わりました。山間の棚田に稲の切り株が取り残されたように並び、次第に秋も深まっていきます。

先月お彼岸の法座が終わったあと、宇佐市の勝福寺住職藤谷知道さんに次のようなメールを送りました。



大石 法夫 先生

「先ほど大石先生をお迎えしての彼岸会が終わったところです。大石先生の八十年のご生涯は、私にとってもこの世だけのものとは思われ

ません。前世における長い求道の歩みがあったのことにちがいないと思っています。それから大石先生の話をも命がけで聞いていこうとされている方々（その中には先生の著書に出てくる人で、私のまだ会ったことのない方々も含まれています）の姿も私には真に尊く、どれほど励まされるかしれません。藤谷さんが大石先生を呼んで下さったお陰と深く感謝しています。次回から毎回ご案内させていただけようと思いますので、機会がありましたらぜひお越し下さい。その際はぜひとも夜の法座まで居てください。先生を囲んでの座談がなかなかよいので・・・ではお元気で。ご精進のほどお念じ申し上げます。」（十三、九、十七送信・一部訂正）

これは私の正直な実感です。

私が始めて大石先生に触れたのは昨年十一月頃のことでした。勝

福寺の聞法会から帰った家内が、「今日の講師は広島から来られた大石法夫という先生だったよ」と言つて、講義の録音テープを聞き始めました。私は別に聞く気もないので座敷に行つて本を読んでいた。ところが廊下を伝つてテープの音が聞こえてきます。遠くの声なのでもちろん話の内容はわかりません。しかしその時の声の響きが何か私の心をとらえました。うまく言い表せないのですが、その語り口は、譬たとえて言えば大工の棟梁とうりょうが鋸のこやのみを使う時の一番大事なこつを、「こはこういうふうにするんだよ」と手にとつて教えるような、そんな懇切な感じですよ。その語り口の響きに、おやつと思つたのが最初のきつかけでした。

そこで私も早速テープを聞かせてもらいました。また家内が持つて帰つた資料も読ませてもらいました。その資料というのは、大石先生が月刊誌『在家仏教』に昨年十月号から連載を始められた「一道を歩み続けて」という文章の第一回目と第二回目のコピーでした。

これらを通じて知つた大石先生の今までの人生の歩みは、私にとつてほんとうに大きな驚きでした。特に京都大学の法学部を卒業して就職も決まり、結婚相手も決まっていた前途洋々の先生が、お母さんの導きで藤解照海とうげしょうかいという一人の僧侶に出会い、その後の人生が一変したいきさつ。その後昭和六十年に藤解先生が亡くなるまでの三十八年間、わき目もふらず一筋に師の導きに從つて歩み続けられたこと。これは私にとつてほんとうに信じ難いことでした。

私も今まで宗門内外の先生方にだいぶ接しましたが、どの先生方も一方で古今東西の思想に関する関心を持ち続け、たくさんの蔵書を持ち、精力的にそれらを読破しておられます。そういう幅広い思想的な視野の中で親鸞聖人しんらんしょうにんの教えを明らかにしようとされます。ところが大石先生はエリートでありながら、そういう方面に対する色気をきれいさっぱりと捨て去つておられます。また芸術、文化、趣味、風流の方面についての関心もきれいに捨て去つておられます。そしてただひた



すら藤解照海
という無位無官
の、世間的には
ほとんど無名の
一僧侶の門下に
歸し、ご自分の
生涯の全てをこ
の師一人に投じ
て、師が亡くな
るまでの三十八
年間、ただひた
すら師の化導
(教え導くこ
と)を受けるこ

とに全精力を注ぎ続けられました。

普通であれば、よし一度は一大決心をして師の門下に投ずることがあったとしても、その後の長い人生行路の中で、教学的な関心にひかれてその方面の勉強に興味の比重を移したり、少しは別な先生の話も聞いてみようと思いを起こしてその傘下に走ったりするのが大方であると思います。ところが大石先生は藤解先生が亡くなるまで、ただ一筋に藤解先生の教えのみを受けていかれます。それも藤解先生の化導は生易しいものではなく、大概の人が逃げ出してしまふほどの厳しいもの、しかも先生の心境は十年、二十年、三十年と経過しても容易に進展しない、そういう中においてです。

講義テープの中で、このような先生の歩みを先生ご自身が歌にあらわして、「予科練の歌」の節に合わせて歌っておられました。「光あり」という歌です。この歌の歌詞は次のようなものです。

「光あり」

一、十方衆生と呼びたまう

法蔵菩薩は 光といのち

「願いをこめて」汝がために

南無阿弥陀仏と生れたまう

二、暗い荒野に日は昇り

野にも山にも 故郷の息吹き

「生まれてよかった」人の世に

生死のきづなは 断ち切られ

三、歩み続けた「この道一つ」

心の闇路を 幾十年

師仏の教えなかりせば

何で往けよう光明土

四、共に往こうよ

彼の浄土

往くも還るも

仏のご廻向

昨日も今日も

「願いに生きる」

人の足下に

光あり

五、頂いたいのちだ

時がくる

老いて死するも

仏の御手に

大きな願いに許されて

生きる一日に

光あり

私はこの歌を聞きつつ思わず涙が出てきました。この歌に大石先生の今までの歩みの全てが収まっていることを感じました。それだけでなく、私の生涯もまたこの中に収められていくのだと思いました。

法蔵菩薩は私たち一人一人を、深い慈愛をこめて「十方衆生」と呼んでおられること。心に闇路をかかえて人生行路に行き悩み、暗い荒野を一人とぼとぼと歩んでいるのが私であること。その荒野に日が昇るがごとく、師の教えに出遭い、本願にめぐり合わせてもらうこと。そしてその教えによつて「一切衆生と共に浄土に生まれよう」という、我を超え世を超えた大きな願いに生きる道が与えられること。それらの感銘が一時に私の中に突き上げてくる思いでした。

こうして私は直接この先生にお会いしてお話をお聞きしたいと思うようになりました。そして昨年十二月十日に大牟田市の村上道場の



大分県三光村の長仁寺定例聞法会にて、昼食後のひととき、大石先生のお話を熱心に聞く長仁寺のご門徒の方々

定例会に始めて参加させていただきました。それが大石先生にお出会いました最初でした。これら一連の出会いを通じて、私はこの先生のご生涯は決してこの世のことだけではない

いと思つたのでした。これはその後先生の著書を読み、また直接先生の教えに触れさせていただく毎にその思いを深くしています。私は先生のご生涯の上に法蔵菩薩ほうぞうぼさつのご苦勞を感じます。

以上、私が大石先生にお出会いするに至ったいきさつについて書かせていただきました。このような経緯を経て、何より私自身が聞かせていただくとうと発起して開催することになったのが定例聞法会です。春のお彼岸から秋のお彼岸まで都合六回の聞法会を重ねてきましたが、お参り下さるご門信徒の方々や、大石先生のお話を聞くために遠くからお出で下さる方々のお姿の上に、尊いもの、法蔵菩薩ほうぞうぼさつのいのちが息づいていることを感じさせてもらいます。このような皆さん方と共々に大石法夫先生という稀有けうの念仏者の教えを、その警咳けいがい（せきばらいのこと）に接しながら聞き得るということ、今そのご縁に会い得てい

るということ、そのことに限りない喜びを感じています。

今まで種々のご事情からお参りできなかった方々も多いと思います
が、今後も先生がお元気な限り毎月十六日に定例聞法会を続けますの
で、万障お繰り合わせてぜひお参り下さい。蓮如上人も「仏法には、
世間のひまを闕かきてきくべし。世間のひまをあけて、法を聞くべきよ
うに思う事、あさましきことなり。仏法には明日と云う事はあるまじ
き」とおっしゃっておられます。つまり仏法は暇ひまができてから聞こう
と思っかりては絶対かに聞けない。仮かりに聞いたとしても決して耳には届
かない。そうではなくて世間の仕事たすきに携たずわっているその忙しい時間を
敢えて差し置いて聞くべきである。明日はないという気持ちで聞くべ
きである。こうして始めて仏法が耳に届くようになるのである、と。
このような懇切なお言葉で、私に仏法を聞くに際しての大事な姿勢を
教えて下さっています。

皆さん方のお出でを心よりお待ちしております。

文隆 拝

期 日	平成十三年十月十六日（火曜日）
時 間	〔昼席〕午後一時三十分より〔夜席〕午後七時より
会 場	〔昼席〕心光寺本堂にて 〔夜席〕心光寺庫裏にて
講 師	大石 法夫 先生（広島市在住）

* 夜席は庫裏で先生を囲んで、くつろいだ雰囲気です。じっくりお話を聞くこと
ができます。夜席にもぜひおいで下さい。夕食の準備もしています。

追伸 来月十一月のみは御正忌報恩講ため定例聞法会はお休みとなり
ます。

撰取山 心 光 寺

